

余徳

吉岡 省二

月々に月見る月は多けれど――、旅先で観る月はことさら。満月ならなおさら。旅にあれば、いつもとは違う場所、違う時間が、気持ちを高めてくれるから。

寂聴さんが旅先でご覧になった月に、印象深い随筆がある。ポルトガルのリスボン到着時に、『花に問え』で谷崎潤一郎賞を受賞」の報を受け、その夜の満ち足りたお気持ちを、ホテルから観た中秋の名月に象徴させたものだ。冒頭に引いたよみ人知らずの歌にもある、名月を愛でつつ、来し方にも思いを馳せたとか。

そのリスボンに生まれ、余生を徳島で過ごしたポルトガル人、ヴェンセスラウ・デ・モラエス。寂聴さんは小学生

に上がりたての頃、近所で彼の淋しそうな後ろ姿を見かけたという。日課にしていた墓参りの帰り道だったようで、そんな彼の最晩年の悲哀を、寂聴さんは人形浄瑠璃『モラエス恋遍路』に著された。リスボンへの旅も、後年のこの作品に繋がる、モラエスの取材であった。

寂聴さんのお話や作品をきっかけに、私もモラエスに興味を持ち始めていたところ、徳島でその人形浄瑠璃が上演されると知り、羽田から朝一番の飛行機で向かった。

心待ちにしていた舞台の幕が開く。細やかな人形の動きに目を見張り、その世界に引き込まれていった。緩やかに耳に届く謡いに、阿波踊りの囃子。なんだか夢のよう……。？ はっ！と我に返ると、舞台はクライマックスに。日々の

寝不足がたり、居眠りをしてしまったのだ。これを観るためにやって来たのに、本当に悔しい。

しかし以前、このように「舟を漕ぐ」ことは、決して悪いことではないと教えてくださったのはT氏。以前勤めていたホテルで担当した、寂聴さんの『源氏物語』をテーマにした企画にご出演いただいたことから、ご厚誼を賜った。

T家は代々、雅楽を担う^{がくけ}楽家。氏もかつて宮内庁式部職楽部で首席楽長を務められた。少年時代には、マッকারサーの前で舞楽を披露されたこともあり、当時の写真を見せていただいたことも。楽部では宮中晩餐会で洋楽の演奏も担当ため、子供のころから両方をみっちり勉強させられたという。

「我々音楽家は、聴く人が居眠りをするような演奏をしなければならいんです。」

「え？ 失礼な！ つて怒りたくないませんか？」と私。

「心地よくないと寝られないでしょ？ うつらうつらさせるような演奏を、と先輩からも教わってきました。」

企画の打ち合わせ段階でのこと。T氏とご一緒にしていた

エレベーターに、偶然、寂聴さんも乗ってこられた。お引き合わせしなければと思う間もなく、笑顔で会釈を交わされるお二人。それまでお二方とも「面識がある」とは一言もおっしゃらなかったのだが、その奥ゆかしさに感じ入るとともに、自身のおこがましさに恥じ入ったのだった。

モラエスもお二人のように、社会的な地位はあっても、驕り高ぶるような人ではなかったようだ。数学と語学の成績が抜群で、海軍士官学校を首席で卒業後、軍人に。フランス語、英語、中国語、日本語に堪能な上、後には文筆活動まで。そんな能力をひけらかすこともなく、来日以降は外交官となった。京都御所での信任状捧呈式では、両陛下に謁見を賜った記録も残る。

信任状捧呈式は、外国の大使（または公使）着任にあたり行われる儀式だが、前述のホテルはかつて、皇居でのその儀式に向かう馬車（もしくは乗用車）の出発起点となっていた。式のあと、大使はホテルに戻り、ゆっくりお茶などを楽しまれる。現在の起点は東京駅に変わってしまったが、かつてのその車列と同じルートで、寂聴さんも参内さ

れたことがあった。文化勲章の親授式だ。記者会見なども終えてホテルに戻られた表情は、なんとも満ち足りた笑顔だった。

あれから、随分と時が経った。

寂聴さんご遷化ののち、ご在世なら満百歳にあたる日に、また徳島で『モラエス恋遍路』の上演があり、今度こそ！とリベンジに向かった。

こんなに強い気持ちで臨むのに、またまた眠気が襲ってくる。座って観ているだけに、本当に必死だ。でも仕方がない。謡い、奏で、演じる皆さんが素晴らしいのである。それでもなんとか念願叶い、すべてを観ることができたので、「次に進んでよし」という及第点をもらえたような気がした。

翌年、新型コロナウイルスによる行動制限も大幅に緩和された夏休みに、ポルトガルへ。ヨーロッパ最西端の岬もあるこの国を、最果ての地と聞けば物悲しいイメージも浮かぶが、実際には明るい日差しにあふれ、海の幸に恵まれ、美味しいワインもたくさん。モラエスが寄稿していた新聞「コメ

ルシオ・ド・ポルト」が発行されていた北部の街、ポルトから入り、バスで町々を巡りながら南へ。修道院を改装したホテルなどに泊まり、その土地のワインや料理を楽しみながら、モラエスの生まれ育った街、リスボンへと至る。

街の広場には、白黒二色で描かれた波模様の石畳が広がっていた。昔、マカオの広場でも同じ模様の石畳を見たことを思い出す。大航海時代を切り拓き、洋の東西を繋いだかつての海洋王国に想いを馳せ、からりと乾いた風に吹かれながら、のんびりと街を歩いた。

名物の路面電車もケーブルカーもまだ動いていない日曜の朝、モラエスの生家を訪ねた。線路の敷かれた坂道を上って下って、また上って。すれ違う人もなく、聞こえるのは鳥のさえずりだけの閑静な住宅街に、その家はあった。グリーン 그레이の外壁に、ポルトガル語と日本語で解説が書かれた陶板があるものの、現在も人が暮らしているようだ。

ここで成長し、立派な成績で学業を修め、軍人・外交官の地位や名誉も得たモラエス。日本とポルトガルを何度も往復できるほどの十分な資産もありながら、一度も帰国することはなかった。時代の波に流されつつあった世界の東

の果てで、孤独のうちに没する。

人生も何事も、光が当たれば影も生まれる。とはいえ諦念とは簡単にはくれない、何が彼をそうさせたのかは、誰にも分からない。家の付近をゆつくり歩いて、また同じ道に戻った。

ポルトガル人特有の情緒を表す「サウダーデ」という言葉がある。そのニュアンスを解するのは難しいが、「孤独」と訳され、「また会いたい」「あのころに戻りたい」といった感情が込められているとか。悲しい記憶よりも、良い思い出を懐かしむ方が近いのだろうか。

そんなサウダーデの感情を込めて歌う、国民音楽の「ファド」は、運命というその語の意味どおり、哀愁を感じる旋律、切ない歌声が、この国の歩んだ光と影を感じさせる。震災などで国力が低下し、財政的にも維持が難しくなった植民地から、現地の人々の苦しい身の上を歌った音楽が逆輸入され、独裁政権による抑圧の時を経て、現在のスタイルとなったそうだ。

旅の最終日、そんなファドを聴けるレストランへ。バス

で向かう途中、ホテルの看板に目が留まる。寂聴さんがリスボンへいらした時に滞在されたホテルだ。黄昏時、多くの車が行き交う喧騒の中、

——ここから観た月だったのか……。

と、窓の外に流れる街並みを、ぼんやり見送りながら想った。

よく冷えた白ワイン、美味しい魚料理をいただいたところで、演奏が始まる。憂いを帯びた男性の歌声、切々と歌う女性の歌唱が、深夜まで続く——。

店を出たら、偶然にも空には満月が皓々と輝き、よぎる雲もない。歌声も耳に残り、旅愁が胸に沁み入る帰り道。秋も近いようだ。

人が月を観るときは、心静かに、何かに想いを馳せている。寂聴さんもリスボンの名月を愛でながら、かつて愛した男たちのことを想ったと吐露している。モラエスも日本で月を仰ぎ見て、二度と戻ることのない、ここリスボンで過ごした若き日々、日本で愛した二人の女性を想い、サウダーデに浸っていたのだろうか。

この年、モラエスの著書『おヨネとコハル』が上梓されて百年を迎えた。